

[18]韓国研究センター年報

<https://hdl.handle.net/2324/2004823>

出版情報：韓国研究センター年報. 18, 2018-03-31. Research Center for Korean Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

韓国研究センター客員教授



第42代 金妍姫

大邱大学校
社会福祉学部 教授

任期：2017年4月20日
～ 2017年7月17日

専門は、臨床社会福祉。社会福祉学博士。ソウル大学校社会福祉学科にて博士号を取得後、米国 Asian Pacific Psychological Services Executive Directorを経て、2012年から現職。

韓国研究センターでは、韓国人女性結婚移住者のコミュニティ形成とSNSが果たす役割について研究された。在任中は、「超国家的な生活の主体としての結婚移住女性の転換経験とメディア行為者ネットワークの役割：中国出身女性を中心として」と題する研究発表を行うなど、精力的に活動された。



第43代 李宇衍

落星岱経済研究所研究員

任期：2017年5月2日
～ 2017年8月30日

専門は、韓国経済史。経済学博士。韓国経済史。成均館大学大学院経済学科にて経済学博士号を取得。米国ハーバード大学 Visiting Fellow、ソウル大学校経済学科講師などを経て現職。在任中は「戦時期日本へ動員された朝鮮人労働者について一鉞夫を中心に」と題する研究発表を行うなど、植民地期における韓国人徴用工問題について研究された。



第44代 ジュヨン・リ

ヘブライ大学
アジア学部 助教授

任期：2017年10月1日
～ 2018年1月31日

専門は、近代韓国文学、植民地文化。文学博士。ヨーク大学人文学部にて博士号を取得後、トロント大学マック国際問題研究所訪問学者、ウィテンバルグ大学 東アジア科 Luce Postdoctoral Fellowを経て、2013年から現職。ヘブライ大学コリアンスダディーズプログラムダイレクター。

最近の著書は、「Making Sense of Fiction : Social and Political Functions of Serialized Fiction in The Daily News (Maeil sinbo) in 1910s Korea,」 Journal of Korean Studies や “An Investigation of a Korean Translation of the Japanese Romance Novel, The Gold Demon(金色夜叉),” Sungkyun Journal of East Asian Studies (2015) など。

在任中は、「探偵、ファム・ファタールそして植民地主義：植民地朝鮮の探偵小説から読みとく犯罪の大衆的表象」と題する研究発表を行うなど、特に日本の探偵小説と朝鮮の探偵小説の比較を中心に研究した。

「世界トップレベル 研究者招へいプログラム【Progress 100】」にかかる招聘教員

韓国研究センターにおいては、「<森>と<水>と<人>の人文社会科学 一九大・旧外地演習林の東アジア環境史的ポテンシャル」と題する共同研究テーマをもって学内の競争的資金である平成29年度の「Progress 100（トップ100大学交流支援型）」に応募し、採択の栄に与りました。この制度は世界大学ランキングで100位以内の国外大学から著名な研究者を招聘して、九州大学における国際的な共同研究を推進することを目的とするものです。

< 招聘外国人訪問研究員 >



フィリップ・C・ブラウン
オハイオ州立大学 歴史学部 教授

専門は、日本近世史・環境史。歴史学博士。ペンシルバニア大学にて博士号を取得後、オハイオ州立大学助教授、ミシガン大学アナーバー校客員副教授などを経て2010年から現職。

最近の著書に、“Reverse Flow: The Role of Built Environments in Shaping Disaster.” *Technology and Culture* 58, no. 1 (2017 2017) : 170-81., 編纂書としては、*Science, Technology, and Medicine in Imperial Japan*, co-edited with David Wittner, London: Routledge, 2016がある(その他多数)。

福岡滞在中は、各種の講演や学生への助言を行う一方、「20世紀前半の東アジアにおける技術移動」と題する研究発表を行うなど、台湾・満洲・朝鮮といった旧植民地と日本「内地」との間で見られる「技術移転」の問題を中心として研究された。

< 特定プロジェクト招聘教授 >



趙文燮
ソウル大学校 地球環境科学部 元教授
任期：2017年12月16日～2018年3月15日

専門は、岩石学およびテクトニクス。理学博士。米国スタンフォード大学にて理学博士号取得。1991年からソウル大学校自然科学大学地球環境科学部教授。韓国科学技術翰林院会員。韓国岩石学会会長(2011年～2012年)、西オーストラリア大学および米国スタンフォード大学訪問教授など歴任。*Journal of Asian Earth Sciences*など国際学術誌編集委員として活動中。在任中は、これまで行ってきた地構造進化史研究を基盤とした日本列島と朝鮮半島の対比、特に九州北部および朝鮮半島に見られる古生代地層との相互関連性について研究されるとともに、ご自身の来歴を踏まえた韓国における地学研究の歴史について講演を行われた。

定例研究会

今年度、韓国研究センターが開催した定例研究会を紹介する。客員教授、訪問研究員による研究会を行った。国際結婚、安全保障や植民地期の朝鮮などその内容は多岐にわたり、毎回好評を博した。

< 第77回定例研究会 >

* 日 時：2017年6月13日(火)14時00分～17時00分

* 場 所：韓国研究センター 1階会議室

* 報告者①：14時00分～15時20分

金娟姫(大邱大学校社会福祉学科学科副教授・韓国研究センター客員教授)

* 発表題目：「초국적 삶의 주체로서 결혼이주여성의 전환경험과 미디어 행위자네트워크의 역할：중국출신여성을 중심으로」

(超国家的生活の主体としての結婚移住女性の転換経験とメディア行為者ネットワークの役割：中国出身女性を中心として)」



* 概要：本発表では、韓国へ結婚移住した中国人女性とテレビやパソコンといったメディアテクノロジーとの関係性に注目した。新しい社会に定着するなかで、彼女たちはメディアテクノロジーを生活へ積極的に取り込んでいる。この過程における各行為者との相互作用を通じて、中国人韓国結婚移住女性は、中国人だけではなく、韓国人として受け入れられたいという二重的アイデンティ

ティーを持つ存在へと転換している。

* 報告者②：15時30分～17時00分

李宇衍(落星岱経済研究所研究員・韓国研究センター客員教授)

* 発表題目：「전시기 일본으로 동원된 조선인 노동자에 대하여-광부를 중심으로-」

(戦時期日本へ動員された朝鮮人労働者について—鉱夫を中心に—)



* 概要：本発表では、太平洋戦争において朝鮮半島から日本へ動員された炭鉱夫の労働環境は、先行研究が主張するものとは異なり、計画的および組織的な“民族差別”はなかったことに注目した。朝鮮人炭鉱夫が受け取った賃金は、日本人のそれと大きな違いはなく、彼らの能力による格差しか存在しなかった。彼らの賃金は、朝鮮の家族へと送金されたほか、現地において多様な用途で使用されていた。また、朝鮮人と日本人間の賃金格差は戦争時期において縮小されたとする資料もある。

< 第78回定例研究会 >

* 日 時：2017年7月26日(水)15時00分～18時15分

* 場 所：韓国研究センター 1階会議室

* 報告者①：15時00分～16時15分

富樫あゆみ(九州大学韓国研究センター特任助教)

* 報告題目: 自著紹介「日韓安全保障協力の検証—冷戦以後の脅威をめぐる力学」



* 概要: 日本と韓国では、“脅威”が異なることに着目し、脱冷戦期に展開された日韓安全保障協力の形成・不形成メカニズムについて分析した。日本にとって、脅威は物理的脅威。国益であるが、韓国にとってはそれに加えて“日本の脅威”が存在する。韓国の日安全保障協力は、構造的要因としての脅威と国内的要因としての日本の脅威との力学関係で決定される。永島教授からは表に出てこない資料に注目する必要があるとの指摘があった。また、崔准教授からは、日本の脅威は物理的側面もあるのではないかと、また、日韓が安全保障協力を進める条件について質問があった。

* 報告者②: 16時30分～18時15分

武藤優(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程3年)

* 報告題目: 「植民地期朝鮮における李王職雅楽部設置と奏楽実態」



* 概要: 1920年代の韓国では、数名の日本人音楽研究者らによって朝鮮雅楽の衰退の危機と、その保存を求める声が高まっていた。今回の発表では、

朝鮮における朝鮮雅楽奏楽集団である李王職雅楽部の奏楽実態についての特に1920年代の活動に着目し、発表を行った。

< 第79回定例研究会 >

* 日時: 12月20日(水)15時00分～17時30分

* 場所: 韓国研究センター1階会議室

* 報告者①: 14時00分～15時15分

橋本妹里(九州大学韓国研究センター学術研究員)

* 発表題目: 「地域統合の装置としての植民地公園」



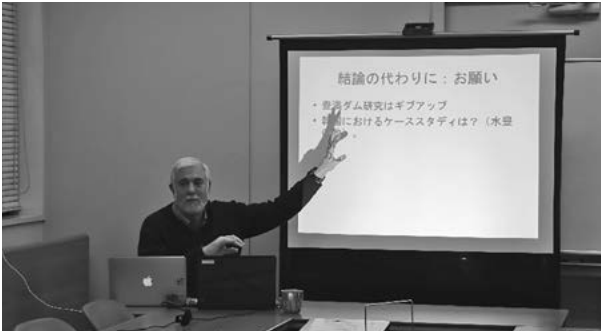
* 概要: 本発表では韓末～植民地期にかけて日本人が朝鮮に建立した神社の多くが公園と併存していた事実に着目し、その理由を日本における近代公園制度の創設までさかのぼり明らかにした。同時にそのような神社と併存する公園が備えていた教化の機能を検討することで、神社それのみではなく広く境内空間を含めた「公園」が、植民地において果たした地域統合の役割について改めて考察を試みた。

* 報告者②: 15時30分～17時00分

フィリップ・C・ブラウン(オハイオ州立大学歴史学部教授・韓国研究センター訪問研究員)

* 発表題目: 「20世紀前半の東アジアにおける技術移動」

* 概要: ①技術史や②植民地時代史に関する研究は欧米においても発展してきた。しかしながら、このような発展は限られた分野にとどまっており、研究の中心はいずれも、欧米の国々に関係する課



題であった。①と②の両方を兼ね備えた研究であっても、どのような技術によって欧米の帝国主義が可能となったかについて論じている。その一方、20世紀の日本帝国と技術移動史の研究によって、日本帝国は世界水準の土木技術を持ち合わせながらも国外にその生産を依頼するなど、典型的な西欧パターンとは異なる様相を呈していることが明らかになった。

< 第80回定例研究会 >

* 日時：2018年1月23日(火)13時30分～14時45分

* 場所：韓国研究センター 1階会議室

* 報告者：ジュヨン・リ客員教授

(ヘブライ大学アジア学部助教授)

* 発表題目：「탐정, 팜므 파탈, 그리고 식민지: 식민지시기 탐정소설에 나타나는 범죄에 대한 대중적 상상력」

(「探偵、ファム・ファタールそして植民地主義: 植民地朝鮮の探偵小説から読み解く犯罪の大衆的表象」)



* 概要：本発表は、植民地朝鮮における探偵小説の形成過程をローカルおよびトランスナショナル

な脈絡から探った。特に、本報告では蔡萬植、金東仁、金来成といった作家を取り上げ、彼らが受けた植民地資本主義の物質的および精神的影響が、作品における探偵、ファムファタール、犯罪類型、都市環境および登場人物の社会的もしくは地理的流動性へ投影されたことに着目し、1930年代および1940年代に発刊された探偵小説を対象として朝鮮人作家が経験した「近代」が探偵小説という大衆小説へ反映されていることを明らかにした。

< 第81回定例研究会 >

* 日時：2018年1月30日(火)14時00分～16時15分

* 場所：韓国研究センター 1階会議室

* 報告者①：14時00分～15時00分

辛承模(シン・スンモ) 研究員(東国大学日本学研究所)

* 発表題目：「재일에스닉 잡지에 나타난 재일디아스포라의 자기서사」

(在日エスニック雑誌に現れた在日ディアスポラの自己叙事)



* 概要：本発表は在日エスニック雑誌に現れた在日ディアスポラの自己叙事を検討することで、既存の歴史、文学研究で見られる在日社会に対する集団化と定型化の限界を克服し、自己叙事の多声的な特徴を浮き彫りにした。この作業を通じてこの分野に関する研究の多様性に寄与できればと願う。具体的には、在日エスニック雑誌の中の自己叙事物の明細を確認しながら、時期別にどのような内容と特徴、傾向を呈しているかを検討し、自己叙事の具体的な事例が論じられた。

* 報告者②：15時10分～16時15分

李丞鎭(イ・スンジン) 研究員(東国大学校日本学研究所)

* 発表題目：「재일디아스포라의 통합적 문화지형을 연구하기 위한 시론」

(在日ディアスポラの統合的文化地形を研究するための試論)



* 概要：東国大学校日本学研究所の重点研究所支援事業<在日ディアスポラの生態学的文化地形とグローカリティー>の概要が報告された。東国大学に本学研究所が推進する当事業は、在日ディアスポラ関連の資料を総体的に調査・発掘・収集し、生態学的観点から分析して体系化することを目的としており、今回の報告ではこの研究主題と計画が説明された。

アジア太平洋カレッジ グローバル人材育成のための日韓米「国際体験型」共同教育プログラム

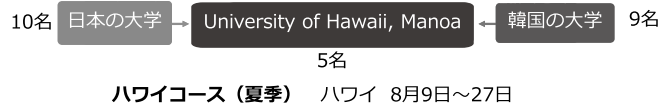
アジア太平洋カレッジは、学部1,2年生を対象に海外の学生とのPBL (Problem Based-Learning) とTBL (Team-Based Learning)形式の協働学習の場を提供している「国際体験型」共同教育プログラムである。2年を1クールとして、1年目に日本と韓国を往復して実施する「キャンパス日本」「キャンパス韓国」と、翌年の2年目に米国ハワイで実施する「キャンパスハワイ」で構成されている。今年度のプログラムでは、日韓米の学生が国境をまたぐグローバル課題の解決に向けてチームで取り組み、協力して学び合うことに重点を置いて実施した。

ンパス韓国」と、翌年の2年目に米国ハワイで実施する「キャンパスハワイ」で構成されている。今年度のプログラムでは、日韓米の学生が国境をまたぐグローバル課題の解決に向けてチームで取り組み、協力して学び合うことに重点を置いて実施した。

1年目 キャンパス日本・キャンパス韓国 (全学部1・2年生から選抜)



2年目 キャンパスハワイ (前年度の日韓プログラムに参加した学生から選抜)



キャンパス日本
キャンパス韓国



共通課題を持ってディスカッション



協働プレゼンテーション



企業でのビジネスワークショップ

キャンパスハワイ



○キャンパス韓国・キャンパス日本

●夏季プログラム

日 時：2017年8月9日～23日

場 所：九州大学、西南学院大学、釜山大学校

●冬季プログラム

日 時：2018年2月14日～28日

場 所：九州大学、西南学院大学、ソウル大学校、高麗大学校

夏季には、日本側(九州大学、西南学院大学)40名、韓国側(釜山大学校)50名の計90名の学生が2週間にわたり、釜山と福岡でプログラムに参加した。冬季には、日本側(九州大学、西南学院大学)20名、韓国側(ソウル大学校、高麗大学校)20名の計40名の学生が2週間にわたり、ソウルと福岡でプログラムに参加した。英語を共通言語とした講義、共通課題を持ってディスカッションとプレゼンテーション、フィールドワーク、文化体験、ビジネスワークショップなどを行った。ディスカッションは、The issue of youth's futureとThe Depopulation and immigration issueという日韓共通課題についてディスカッションし、プレゼンテーションした。日韓の学生が協働で取り組むことでそれぞれの社会に対する理解を深めることができた。福岡で実施したインターンシップでは、今年度から協力をいただいている福岡ソフトバンクホークス株式会社をはじめ、住友商事九州株式会社、西日本電信電話株式会社(NTT西日本)、公益財団法人福岡観光コンベンションビューロー、日本通運株式会社、株式会社安川電機、RKB毎日放送株式会社の協力を得て実施した。事前に企業から与えられたテーマに基づいて、グループごとにプレゼンテーションを行い、企業の方からコメントを頂く大変貴重な機会となった。地元の企業との連携を図り、地域をあげての人材育成に取り組んだ。各企業が事前に提示したプレゼンテーマは以下の通りである。

◆インターンシッププレゼンテーション
(キャンパス日本)

※参加前の2ヶ月間にわたりグループ調査・研究、プレゼンテーション準備

・住友商事九州株式会社

東アジアをつなぐ新しいビジネスプラン

・福岡ソフトバンクホークス 株式会社

福岡への海外旅行客を野球観戦に誘致するには?

・株式会社安川電機

安川電機の製品群(モーター、インバーター、ロボット)を活用した新規事業展開プロジェクト

・西日本電信電話株式会社(NTT西日本)

事前テーマ

自国の教育において、ICTがどのように活用されているか

当日のグループディスカッションテーマ

これからの『教育×ICT』について：ICTを活用した新しい教育について検討し、発表。ICT技術やAI・VRといった最新技術を活用し、今までになかった授業を考える

・公益財団法人福岡観光コンベンションビューロー
事前課題(以下の二つの中から選択して準備)

(1) ストレスのない滞在のため、福岡でこういうところがこうなったらもっと便利、こんなもの(ツールや情報など)があったら便利と思うことについて(ソフト面・ハード面)

(2) 福岡で韓国人に人気でそうな場所、まだあまり知られていない隠れた人気の場所について(観光地、飲食店、ショップなど)
当日ディスカッション(プレゼンテーション後、総合ディスカッション)

一方通行になりがちな両国の人的交流を、どうやって双方向に安定的に増加させるか(政治、流行病、為替、震災など外的要因にとらわれず、人的交流をどう推進するか)

・RKB毎日放送株式会社

日韓両国の若者がどうしても観たくなる、海

峽をつなぐ魅力ある番組とは?—アジアの玄
関口福岡民放の観点から

・日本通運株式会社

次世代のシームレス物流を構築するために、
どのような工夫が必要か

○キャンパスハワイ

日 時：2017年8月9日～27日

場 所：ハワイ州立大学マノア校

昨年度のキャンパス韓国・キャンパス日本に参加した日韓の学生から選抜された19名が参加し、ハワイ州立大学からは5名の学生が参加した。講義では東アジアに対する米国の視点に触れるとともに、多くの移民を受入れてきたハワイの社会を理解することに重点をおいた。ワークショップ型の授業も取り入れ、日韓米の学生が小グループで議論しながら理解を深めることができた。英語アカデミックプレゼンテーションでは、グローバルアジェンダである安全保障や移民(人の国際的移動)というテーマを持って3週間にわたってグローバル社会を舞台にした協力の在り方について、日韓の学生がハワイの学生と協働でディスカッションし、英語での最終プレゼンテーションに挑戦した。各グループが取り上げたテーマは以下の通りである。

◆アカデミックプレゼンテーション
(キャンパスハワイ)

・ Security Issues

Security Cooperation between US-Japan-South Korea

Developmental assistance for solving North Korea problems

・ Migrant Issues

How can we solve the problems that IMMIGRANTS face?

How to satisfy tourists in Fukuoka and Seoul
Save Refugees

ビジネスワークショップでは、ハワイ現地企業の協力を得て実施した。2ヵ月前に企業から与えられたテーマに基づいて、グループごとにプレゼンテーションを行い、日韓米の3国の状況と課題への対応を比較しながら類似性と相違点を見出す大変貴重な機会となった。各企業が事前に提示したプレゼンテーマは以下の通りである。

◆ビジネスワークショップ
(キャンパスハワイ)

※参加前の2ヶ月間にわたりグループ調査・研究、
プレゼンテーション準備

・ Honolulu Star Advertiser

How should newspaper, magazine, TV and web journalists deal with the threat of 'Fake News'?

・ Hawaii Coffee Company

Investigate coffee market situation in your country and propose a marketing strategy. Based on research of consumers' attitude and usage toward packaged coffee prepared at home.

・ Roberts Hawaii

Plan a one day tour in Oahu for college students and propose how to promote it with 'tour Aloha' mobile application

フィールドトリップでは、地元のハワイ大学生とともに、Pearl Harber, Bishop Museum, Kahana Valleyを訪問し、互いの感想を共有する時間を持った。また、移民に関する講義と関連してJapanese Cultural Centerを訪れ、移民社会の歴史やその実態を学び、ハワイと日本、韓国の歴史的なつながりに触れることができた。1年目のキャンパス韓国とキャンパス日本で、互いの相違点と類似点に気づいたことを土台に、2年目には日本でも韓国でもない第三の場所である米国のハワイで、日韓それぞれを相対化し、グローバル視点から日韓関係を捉え直す深化学習を実施できた。

(韓国研究センター准教授 崔慶原)

アジア太平洋カレッジ 報告会

グローバル人材へのファーストステップ -海外の学生とのPBL/TBL-

日時：平成29年12月1日(金)16:30～19:15
場所：九州大学伊都キャンパスビッグリーフ

海外の学生とのPBL (Problem Based- Learning) とTBL(Team-Based Learning)を中心に、参加学生だけでなく、ハワイ州立大学の担当教員、企業ビジネスワークショップの担当者が協働学習の成果を報告した。海外学生との協働学習の意義を共有するとともに、プログラムの充実に向けた多様な意見が提示された。

参加学生による報告

「初心をつかみ直せたハワイ」

九州大学21世紀プログラム2年 図師田美久

ハワイプログラムの3週間は私にとって想像以上に有意義なものとなりました。ハワイや韓国の学生との協働作業を通して英語力を鍛えることができ、国境を越えた友情を育むことも出来ました。特に、アジア太平洋カレッジの特徴である海外の学生との「協働学習」を通して得たものは多くあります。プログラム中は、日本・韓国・ハワイの3カ国の学生で議論をすることが度々ありましたが、はじめのうちは英語力の差があったこともあり、韓国とハワイの学生に圧倒されなかなか主張ができませんでした。九州大学での課題協学などを通して協働学習には慣れていたはずなのに、自分の意見をしっかり主張する習慣が身につけているハワイや韓国の学生の力を見せつけられたようでショックでした。そこからは、このままではいけないと思い、少しずつしっかりと自分の意見を提示でき



アジア太平洋カレッジでは、学部1・2年生を対象に海外の学生とのPBL (Problem Based-Learning)とTBL (Team-Based Learning) 形式の協働学習を行っています。今年の報告会では、日韓米学生の協働学習の成果を、参加学生のみならず連携大学や企業の担当者が報告します。

2017年12月1日(金) 16:30～19:15 (開場16:15)
九州大学伊都キャンパス ビッグリーフ
言語：日本語 (一部日韓逐次通訳)

- 16:30～16:35 挨拶
九州大学総長 久保千春
- 16:35～16:45 アジア太平洋カレッジプログラム紹介
九州大学韓国研究センター教授 波淵剛
- 16:45～17:45 参加学生による報告
九州大学21世紀プログラム2年 図師田美久
西南学院大学文学部2年 児玉胡桃
釜山大学校工学科3年 河漢鐘
ソウル大学校経済学科2年 李在瓊
- 17:45～17:55 講評
九州大学副理事 渡邊公一郎
- 17:55～18:25 Campus Hawaii : A Multilateral Collaborative Learning Experience
School of Pacific and Asian Studies, University of Hawaii at Manoa
Prof. Lonny E. Carlile
- 18:25～18:35 ロジスティクスデザインを通じたグローバル人材育成
日本通運株式会社福岡支店九州営業部長 幸田明男
- 18:35～19:15 懇談会 今後の展開について
コーディネーター：九州大学韓国研究センター長 中野等
*軽食を用意しております。

主催/九州大学韓国研究センター



るように努力しました。プログラムが終わる頃には意識せずとも積極的に議論できたと思います。

何よりも入学後避けていた移民問題に再び取り組めたことは、非常に重要な成果です。プログラムが終わったいま、大学の勉強でもう一度移民問題に向き合ってみようと考えています。なんでも好きなことをとことん追求できる21世紀プログラムという環境を活かして、ハワイでの3週間ではアプローチしきれなかった課題に取り組んでいきたいと思います。

「リーダーシップ力と語学力 ービジネスワークショップでの協働学習ー」

西南学院大学文学部2年 児玉胡桃

グループで課題に取り組む際に、人数が多くなればなるほど多く意見や提案が出るので、まとめることは簡単ではありません。本当の協働作業はそこからスタートすると言っても過言ではないでしょう。しかし、多くの意見の中から何を取りあげるか、どのように絞っていくかを議論する過程の重要性に気づくことができました。昨年度のRKBのプレゼン準備では、グループのなかで自ら主体的に動くことがあまりできず、他のメンバーに託している部分が多くありました。今年はグループの中でしっかり全員の意見を聞き、まとめ、リーダーシップをとって調整でき、自分自身も成長できたと思います。

このビジネスワークショップの経験から、私は、ただ自分たちの意見や提案を出すだけでなく、第三者の客観的な意見を取り入れて改善していくことも大切であること、リーダーシップをとり調整していくことが協働作業の中で欠かせないことを学びました。別の機会にもこの経験を活かしたいと思います。

「アジア太平洋カレッジーその1年間の旅程ー」 ソウル大学校経済学部2年 李在珉

アジア太平洋カレッジプログラムに参加した後、私の人生がどのように変わったかについて話したいと思います。まず、隣国日本についてもっと知る必要性を感じた私は、今年の3月からソウル大学校日本研究所でジュニアフェロー活動を始めました。冬のプログラムに参加してから、日本は世界経済・政治で大きな影響力を持っていること、そして韓国とは古代から交流がありお互い影響し合っていたことから、日本のことをもっとよく知る必要があると感じたからです。

また、夏のハワイプログラムの後、他の国の友だちと旅行しながら、現地で新しいことを体験し学ぶ楽しさを知った私は、ソウル大学のグローバル・コミュニティ・サービス(GCS)という団体での活動を始めました。GCSでは毎回の学校の休みに、ベトナム、フィリピンなど開発途上国を訪問し、その社会の構成員たちを手助けする事業を行っています。

このように、この1年間のアジア太平洋カレッジプログラムは、私にとってとても貴重な経験になりました。最初に目標としていた講義、フィールドワークによる知的成長や、日本の友だちとの交流を通じた人的成長の他にも、日本研究所ジュニアフェローやGCSでの活動のように、新しい活動に挑戦できる基盤を作ってくれたのです。



「Stair to WORLD」

釜山大学校工学科3年 河漢鐘

日本とハワイ大学の学生たちとチームで議論しながら、グローバル課題というものがとても複雑なものであることを実感しました。生命や平和のような倫理的価値は確かに尊重されなければなりません。人道的な観点だけで問題に取り組んだら、様々な現実問題を見逃すことになり、それがまたさらなる問題を生み出すことになります。

私は、プログラムを通じて、物事に対してもっと深く考えるということを学んだと思います。グローバル課題について考える際、様々な見方を持つ外国人と一緒にコミュニケーションしながら、多様な観点から問題を眺めることができる能力を養わなければならないと思いました。私が経験したアジア太平洋カレッジは、未来を作っていくかなければならない日米韓の学生たちが、グローバル課題に興味を持ち、解決方法を見つけていくといった、一つの未来社会の場だと思っています。アジア太平洋カレッジで日米韓の学生と出会うことができ、グローバル課題に対して自分なりの考えをまとめてみることができ、他の学生たちと議論しながら解決策を提示できたことは、とても貴重な経験でした。

(報告会での発表から抜粋)

第2回韓国前近代史若手研究者セミナー

日時：2017年9月1日～4日
 場所：伊都キャンパス多目的ホール、
 JR博多シティ 10階会議室
 共催：韓国国際交流財団

韓国研究センターは今夏、9月1日より4日にかけて「第2回韓国前近代史若手研究者セミナー」を開催した。本セミナーは、韓国史に関心をよせる若手研究者の育成とネットワーク構築を目的として、好評を博した昨年度に引き続き、韓国国際交流財団の助成事業として実施された。

今回のセミナーは、昨年度の宗像市から福岡市内へと会場を移し、本学伊都キャンパス多目的ホールおよびJR博多シティ会議室を会場にして開催された。セミナーには、日本国内の各大学から前近代の韓国史研究の専門家および韓国史を専攻する大学院生(学部生を含む)20名、韓国からは高麗大学校・延世大学校および韓国学中央研究院から教員および大学院生を含む計10名が、加えて日本側からも第一線で活躍している韓国史専門家と若手研究者を含め総勢37名が参加し、3泊4日の日程で寝食を共にした。



中野韓国研究センター長
による開会の辞

セミナーの内容としては、初日に行われた早稲田大学文学学術院の李成市教授による記念講演を皮切りに、2日目には参加学生5名(日本側参加者3名・韓国側参加者2名)による研究報告が行われ、

指定討論者のみならず多数の参加者からの質疑応答が繰り広げられた。午後には、昨年同様、古代・高麗・朝鮮の専門時代別の分科会が開催された。

3日目は、今津元寇防塁、鏡山展望台、名護屋城址など前近代の日本と大陸、朝鮮半島の歴史を



開会式の全体写真

考える上で重要な史跡を踏査するなど、実践的な内容が盛り込まれた。最終日には、複担教員でもある人文科学研究院森平雅彦教授や鹿児島国際大学の太田秀春教授といった専門家による講習が行われた。

なお、セミナー後に実施したアンケート調査や参加記からは、昨年に増してセミナーに対する参加者の満足度の高さが窺われた。世代・国籍を超えた活発な学術的交流が行われたことも特筆されよう。参加者からは、韓国史に対する日本と韓国の研究アプローチの違いについて積極的な意見交換が行われたとの肯定的な意見が目立った。日韓のみならず、本セミナー参加を契機として韓国史を専門とする日本国内の若手研究者が新たなネットワークを形成する動きがみられるなど、セミナーの効果は着実に発揮されていると言えよう。

また、ほぼ全員の参加者が次回のセミナー開催と参加希望を明らかにしている。研究報告や討論、そして史跡踏査を通して参加者の研究意欲を刺激することができた点も評価することができよう。第一線で活躍している時代ご



永島副センター長
による閉会の辞

との韓国史研究者と若手の学究が一堂に会する機会は、それほど多くないという現状にあって、本セミナーの開催意義は評価されよう。

本センターは、学内外の研究者との研究会や各種ワークショップの開催を通じて、今後とも次世代の若手研究者の育成と、研究者間のネットワークの形成に注力していきたい。

【第1日】

場所：JR博多シティ 10F会議場

14:00 集合・参加者登録

14:30-16:15 **【開会式】**

- 1.開会の辞：中野等 教授
(九州大学韓国研究センター長)
- 2.韓国前近代史若手研究者セミナー趣旨説明
- 3.開催記念講演：李成市 教授
(早稲田大学文学学術院)

16:20-17:15 **【ガイダンス】**

- 1.スケジュール案内
- 2.参加者自己紹介
- 3.全体記念写真撮影

18:00 夕食 場所：JR博多シティ 9F会議場

【第2日】

場所：九州大学伊都キャンパス 多目的ホール

09:30-12:00 全体発表会

12:00- 昼食

13:30-15:30 全体発表会

13:30-15:30 分野別ディスカッション
各自研究紹介(5～10分程度)

18:30- 夕食

【第3日】

現地研修

09:00- ホテル出発
今津元寇防塁・唐津・鏡山展望台

12:00- 昼食

13:30- 名護屋城博物館・名護屋城址

18:30- 夕食

【第4日】

場所：JR博多シティ 10F会議場

09:00- **研究法講習会**

森平雅彦 教授
(九州大学人文科学研究院／韓国研究センター)
太田秀春 教授
(鹿児島国際大学国際文化学部)

12:00- **【閉会式】**

- 1.閉会の辞:永島広紀 教授
(九州大学韓国研究センター副センター長)
- 2.祝辞:崔玄洙 所長
(韓国国際交流財団東京事務所長)
- 3.韓国側代表者：都賢喆 教授
- 4.全体記念写真撮影

13:30- 昼食、解散



名護屋城址にて



鏡山展望台にて



今津元寇防塁



李成市教授（早稲田大学）による基調講演



太田秀春教授による講習



森平雅彦教授による講習



全体発表のようす



分野別セミナーのようす

本セミナーでは、参加者が古代・高麗・朝鮮の各時代の計3つの分野に分かれ、各分野の専門家との質疑応答が行われた。

「Progress100」招聘研究者 講演会 「我が歩みし学問の道 내가 걸어온 학문의 길」

日時：2018年2月22日(木)

場所：伊都キャンパス比文言文研究教育棟321会議室

共催：地球社会統合科学府



韓国研究センターは、「Progress100」共同研究「<森>と<水>と<人>の人文社会科学—九大・旧外地演習林の東アジア環境史的ポテンシャル—」による特定プログラム招聘教授として九大に着任された趙文燮教授を講師としてお迎えし、「我が歩みし学問の道 내가 걸어온 학문의 길」と題する講演会を、地球社会統合科学府による共催で開催した。本講演会は、韓国における岩石学の泰斗である趙文燮教授からその学問的蘊奥の一端を、ご自身の経験を通じてお話いただくとともに、ひいては韓国における自然科学の発展史に関して、後学の指針とすべく企画されたものである。

講演に先立ち、まず永島広紀教授が「ソウル大学草創期の自然科学研究者について」と題する関連報告を行った。関連報告では、ソウル大学の草創期にまつわるエピソードについて趙文燮教授のご講演内容と関連付けながら、若干の紹介を試みた。

永島教授による報告の後、趙文燮教授と親交の深い小山内康人教授(地球社会統合科学府長)より講師紹介が行われた。引き続いて行われた趙文燮教授による講演では、出生から現在に至るご自身の人生および学問の軌跡についてお話された。特に、平壤出身であるご両親の経歴から地質学を専攻した契機、韓国における地質学研究の先駆者である彊石・金鳳均博士との交流などにも言及され、人文科学の見地からも非常に貴重な内容を含むものであった。

<プログラム>

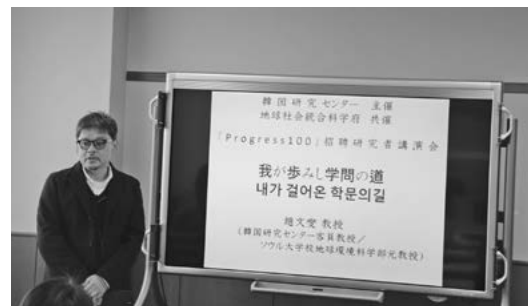
1. 開会の辞：中野等韓国研究センター長／副学府長
2. 関連報告：永島広紀韓国研究センター教授
「ソウル大学草創期の自然科学研究者について」



3. 講演者紹介：小山内康人地球社会統合科学府長
4. 講演：趙文燮教授「我が歩みし学問の道」



5. 閉会の辞：中野等韓国研究センター長／副学府長



AFELiSA 2017 ワークショップ「大学『演習林』史の学術的な可能性」

日時：2017年11月8日

場所：九州大学医学部百年講堂

韓国研究センターでは2017年11月8日～9日にかけて開催された農業科学に関する日韓合同国際シンポジウムAFELiSA 2017 (International Symposium on Agriculture, Food, Environmental and Life Science in Asia) において「大学『演習林』史の学術的な可能性」をテーマにワークショップを開催した。

ワークショップは九州大学大学文書館副館長折田悦郎教授が司会を担当し、同大学文書館の藤岡健太郎准教授が報告を行った。韓国研究センターからは永島広紀副センター長が報告を行い、訪問研究員のフィリップ・C・ブラウン教授(オハイオ州立大学歴史学部)がコメンテーターとして参加した。

まず始めに司会の折田教授から九州大学文書館が所蔵する大学事務文書を活用したこれまでの研究成果について紹介が行われた。次いで藤岡准教授による演習林と帝国大学財政についての報告では、北海道、東京、京都、九州の各帝国大学が所有していた日本国内外の演習林における収支状況が示され、北海道・樺太を除く殆どの地域で支出が収入を大きく上回っていたにも拘らず、日本国内では温帯、熱帯地域に広面積の演習林を保持することが難しいという理由から植民地の演習林が維持されたことを指摘した。また各大学の財政における演習林収入の割合では各大学とも大学財政における演習林収入の比重は決して大きくはないものの30年代後半からその金額が増加していることが指摘された。



永島教授による報告の様子

永島副センター長の報告では、まず九州帝国大学

農学部において当時「傍系」と呼ばれた専門学校経由の入学者が多いという特徴が示され、中でも特に朝鮮の専門学校からの入学者が目立ったが、これには韓国勸業模範場長で水原農林専門学校の校長も勤めた本田幸介が後に九州帝国大学農学部長となったという背景を指摘した。彼ら留学生は後に韓国における農学の重鎮として活躍するが、このような戦後まで続く朝鮮と帝国大学の結びつきを示す事例以外にも、造林や砂防といった共通の問題を巡る演習林と地域社会との関連性、各大学が保有する演習林関連資料による総督府記録の補完など、帝国大学演習林研究の日韓両国における学術的意義が提示された。

両報告を受けてブラウン教授は海外における日本・韓国の林政研究の動向を紹介するとともに、林政そのものの研究に留まらず農業との関連、また林政と災害史など比較していくことで政策だけに依らないいわゆる下からの歴史を見ていく必要性を強調した。

以上のような報告内容に対し会場の九州大学農学研究院(農学部附属演習林・森林生産制御学分野)の古賀信也氏から、各帝国大学の演習林収入について材木の価格の高下を考慮する必要性を指摘し、また荒廃した森林が問題となっていた朝鮮への演習林設置が、森林の再生や砂防を目的に災害時の様相を研究する目的があった可能性への言及など専門的知見からの意見が提示された。



ブラウン教授による討論の様子

以上のような報告内容に対し会場の九州大学農学研究院(農学部附属演習林・森林生産制御学分野)の古賀信也氏から、各帝国大学の演習林収入について材木の価格の高下を考慮する必要性を指摘し、また荒廃した森林が問題となっていた朝鮮への演習林設置が、森林の再生や砂防を目的に災害時の様相を研究する目的があった可能性への言及など専門的知見からの意見が提示された。

「日韓市民100人未来対話」参加

日時：2017年11月9日～11日

場所：済州島 フェニックスアイランド

主催：韓国国際交流財団、東京大学 韓国学研究中心、ソウル大学校 日本研究所

2017年11月9日から11日にかけて、「日韓市民100人未来対話」が済州島フェニックスアイランドにて開催された。「日韓市民100人未来対話」は、日韓両国の専門家や学者のみならず、多様な分野に及ぶ一般市民が主体となり、近年の東北アジアの情勢の変化に関する問題や両国社会が悩んでいる共通の懸案に対する創意的な解決案を共に模索し、未来志向的な日韓関係を構築することを目的として開催された。本事業は韓国国際交流財団、東京大学韓国学研究中心およびソウル大学校日本研究所が主催し、韓国研究センターは協力機関として参加した。韓国研究センターからは、波瀾剛准教授と富樫あゆみ特任助教が出席した。なお、そのほか九州大学からは韓国研究センターの推薦を受けて、武藤優氏(比較社会文化学府博士課程)、山口

佑香氏(地球社会統合学府修士課程)、井上陽南子氏(法学部CSPA)が参加した。

本事業には日韓からそれぞれ50名が参加し、「共通の課題と機会：日韓協力と共同の取り組み」という大きなテーマのもと、人的交流・文化協力、科学技術協力、人口問題と社会福祉協力、草の根協力といった日韓両国が共通して直面している問題について討論する分科会が行われた。各分科会では、日韓からそれぞれ1名が30分ほどの報告を行った。それに対して参加者が意見を述べるなど、各分科会とも3時間に及ぶ活発な討論が行われた。2日間にわたる市民対話の成果として、科学技術や災害といった新たな分野での市民交流の促進など10項目にわたる行動計画が盛り込まれた「日韓市民100人2017済州宣言文」が採択された。



開会式の様子



分科会1「人的交流・文化協力」の様子



発言する波瀾剛准教授



最終討論の様子

<日程>

11月9日(木)

15:30-18:30 [文化体験活動]

15:30 先発隊 (海女博物館 + 城山日出峰)

16:45 後発隊 (城山日出峰)

19:00-21:00 晩餐会(於: ソンサンヘマル)

11月10日(金) 2日目

09:30-10:00 登録

10:00-10:40 [開会式]

・開会の辞: 徐承烈 韓国国際交流財団監事(前駐コトジボワール大使)

・歓迎の辞

- 韓榮惠 ソウル大学校日本研究所所長

- 木宮正史 東京大学韓国学研究所センター長

・祝辞

- 徐正河 済州平和研究院院長

- 飛田雄一 公益財団法人神戸学生青年センター館長

10:40-11:00 [文化講演] ピアニスト崔善愛氏による演奏

11:00-11:10 記念写真撮影

11:25-13:00 午餐会

13:00-15:20

(同時進行)

[分科討論1] 人的交流・文化協力(於: アイランドポールルーム C)

・司会: 李鍾元(早稲田大学教授)

・韓国側の発表者: 南基正(ソウル大学校日本研究所教授)
「日韓人的交流と文化協力: 現状と展望」

・日本側の発表者: 山田貴夫(川崎・富川市民交流会事務局長)

「市民主体、課題の直視、日・韓・在日コリアンとの連帯と共有 - 川崎を事例に」

[分科討論4] 草の根協力(場所: ストーンホール)

・司会: 徐承元(高麗大学校グローバル日本研究院院長)

・日本側の発表者: 磯崎典世(学習院大学教授)

「草の根の交流から協力へ」

・韓国側の発表者: 朴明姫(国立外交院日本研究センター研究教授)

「日韓草の根交流協力における障害と成功への足掛かり」

15:40-18:00

(同時進行)

[分科討論2] 科学技術協力(場所: アイランドポールルーム C)

・司会: 朴喆熙(ソウル大学校国際大学院院長)

・日本側の発表者: 鳥居寛之(東京大学准教授)

「原発事故から考えるエネルギーと環境問題」

・韓国側の発表者: 金暎根(高麗大学校グローバル日本研究院教授)

「日韓『和解学』を始めよう - 科学技術・人文・社会融合的『災難・安全共同体』構築に向けた提言 -」

[分科討論3] 人口問題と社会福祉協力(於: ストーンホール)

・司会: 庵道由香(立命館大学教授)

・韓国側の発表者: 陳泌秀(ソウル大学校日本研究所研究教授)

「少子・高齢化問題と市民社会の対応」

・日本側の発表者: 古屋幸宏(東南アジアの障害児に車椅子を贈る会副代表)

「人口問題と社会福祉協力: 低出産、高齢化、青年雇用、介護と医療」

18:20-20:30 公式歓迎晩餐会 [文化講演] 韓国舞踊

11月11日(土)

09:00-11:00

[総合討論]

・司会: 李元徳(国民大学校日本学研究所所長)

・討論者: 分科討論司会者及び発題者全員(12名)

11:15-11:30

[日韓市民100人宣言文発表]

11:30-11:45

[2018 平昌冬季オリンピックブリーフィング]

柳雲鎬 平昌オリンピック組織委員会参加広報チーム長

11:45-12:00

[2020 東京夏季オリンピックブリーフィング]

藤本ルナ 東京オリンピック組織委員会広報担当係長

12:00-13:30 歓送の午餐会

センターの活動

2017年

- 4月 1日 畠中つゆみ事務補佐員 着任
- 4月11日 第12回研究戦略会議
- 4月20日 金妍姫客員教授(大邱大学校社会福祉学部教授) 着任
- 4月21日 富樫あゆみ特任助教、韓国農業経済学会主催国際シンポジウムにて研究発表を行う
- 5月 2日 李宇衍客員教授(落星岱経済研究所研究員) 着任
- 5月22日 第3回連携・支援チーム会議
- 5月26日 永島広紀教授、韓国・漢陽大比較歴史文化研究所主催国際シンポジウムにおいて研究発表を行う
- 6月 2日 平成29年度第1回韓国研究センター委員会
- 6月 8日 永島広紀教授、内閣官房「明治150年」関連施策推進室の依頼により
第6回「明治150年」関連施策府省庁連絡会議幹事会にて報告を行う
- 6月13日 第77回定例研究会
- 6月30日 曹喜庸・韓国国立外交院日本研究センター所長ほか3名 来館
- 6月30日 菊池勇次助教 退職
- 7月 1日 畠中つゆみ事務補佐員 テクニカルスタッフに配置換え
- 7月17日 金妍姫客員教授 離任
- 7月24日 アジア太平洋カレッジ運営委員会
- 7月26日 第78回定例研究会
- 7月27日 永島広紀教授、宮崎演習林に出張 (～7月28日)
- 7月30日 崔慶原准教授、東京大学グローバル地域研究機構主催公開シンポジウム
「冷戦史研究の新展開をめぐって」において「冷戦と日韓関係」なる題目で研究発表を行う
- 8月 1日 高松佑実事務補佐員 着任
- 8月 6日 永島広紀教授、高知海南史学会大会において「帝国日本と旧制高校」なる題目で公開記念講演を行う
- 8月 8日 平成29年度第2回韓国研究センター委員会
- 8月 9日 アジア太平洋カレッジ キャンパスハワイ(～8月27日)
- 8月 9日 アジア太平洋カレッジ キャンパス韓国・日本(夏季)(～8月23日)
- 8月30日 李宇衍客員教授 離任
- 9月 1日 第2回韓国前近代史若手研究者セミナー 開催(～9月4日)
- 9月29日 平成29年度第3回韓国研究センター委員会

- 10月 1日 フィリップ・C・ブラウン教授(オハイオ州立大学歴史学部) 着任
 ジュヨン・リ客員教授(ヘブライ大学アジア学部助教授) 着任
 橋本妹里学術研究員 着任
- 10月14日 富樫あゆみ特任助教、現代日本学会(韓国)にて研究発表を行う
- 10月20日 中野等教授、韓国国立晋州博物館の依頼により国際シンポジウム「丁酉再亂1597」にて報告を行う
- 10月22日 橋本妹里学術研究員、朝鮮史研究会第54回大会において
 「地域社会統合の装置としての植民地公園—南山の公園化を事例に」なる題目で報告を行う
- 11月 7日 アジア太平洋カレッジ運営委員会
- 11月 8日 AFELiSA2017ワークショップ「大学『演習林』史の学術的な可能性」開催
- 11月 9日 日韓市民100人未来対話 参加
 (於：済州島・西帰浦市フェニックスアイランド、～11月11日)
- 11月15日 永島広紀教授、フェリス女学院大学国際交流学部において
 「戦前の女子高等教育と旧外地」と題する特別講義を行う
- 11月30日 崔慶原准教授、南山大学アジア太平洋研究センター主催公開シンポジウム
 「北朝鮮外交論の再構築」において「北朝鮮外交と韓国」なる題目で研究発表を行う
- 12月 1日 平成29年度第4回韓国研究センター委員会
- 12月 1日 アジア太平洋カレッジ報告会「グローバル人材へのファーストステップ」開催
 (於：伊都キャンパス ビックリーフ)
- 12月 9日 永島広紀教授、九州史学会シンポジウムにおいて「九州大学と留学生」なる題目で報告を行う
- 12月16日 趙文燮教授(ソウル大学校地球環境科学部元教授)着任
- 12月16日 富樫あゆみ特任助教、冷戦研究会主催合評会「日韓安全保障協力の検証」にて基調講演を行う
- 12月20日 第79回定例研究会

2018年

- 1月 1日 波瀾剛教授 副センター長(連携担当)に補職
- 1月23日 第80回定例研究会
- 1月23日 韓国国際交流財団フェロシップ奨学生研究発表会
- 1月24日 永島広紀教授および橋本妹里学術研究員が京都大学フィールド科学教育研究センターに出張
- 1月25日 永島広紀教授および橋本妹里学術研究員が京都大学文書館に出張
- 1月29日 平成29年度第5回韓国研究センター委員会
- 1月30日 東国大学校日本学研究所 辛承模研究員・李丞鎮研究員 来訪

- 1月30日 第81回定例研究会
- 2月 2日 アジア太平洋カレッジ運営委員会
- 2月 7日 平成29年度第6回韓国研究センター委員会
- 2月 8日 白承玉・韓国国立海洋博物館学芸室長、ほか1名 来館
- 2月14日 アジア太平洋カレッジ キャンパス韓国・日本(冬季)(～2月28日)
- 2月22日 「Progress100」招聘研究者講演会「我が歩みし学問の道 내가 걸어온 학문의 길」開催
(於：伊都キャンパス 比文言文研究教育棟321会議室)
- 2月28日 ジュヨン・リ客員教授 離任
- 3月 1日 李宇新教授(ソウル大学校山林科学部)着任
- 3月 2日 平成29年度第7回韓国研究センター委員会
- 3月 5日 「Progress100」ワークショップ「旧外地演習林研究の地平」開催(於：西新プラザ)
- 3月 7日 富樫あゆみ特任助教、「日韓有識者間政策対話」に参加(於：洪川・大明ソノフェリーチェ、～9日)
- 3月12日 韓国国際交流財団フェロシップ選考委員会
- 3月15日 趙文燮教授 離任
- 3月16日 崔慶原准教授、「日中韓次世代朝鮮半島専門家ワークショップ」において
「米朝関係と朝鮮半島の未来」なる題目で報告を行う(於：済州島済州市、～18日)
- 3月20日 第82回定例研究会
- 3月28日 崔慶原准教授、研究会「朝鮮半島の冷戦体制に対する政策提言研究」において
「日韓安全保障関係の展開と限界」なる題目で研究発表を行う(於：東京大学)